６　参加型検討会による地鶏生産農場の改善支援

鳥取県鳥取家畜保健衛生所　　○大石　美智子、宮原　白

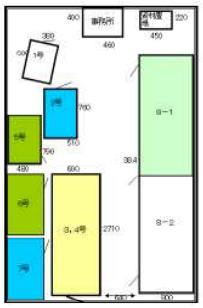
１　はじめに

多角経営企業が農業の一部門として地鶏生産を開始して10年が経過したが、まだ安定しない農場成績を改善するため検討会を開催し、農場の改善支援を行ったのでその概要を報告する。

２　農場の概要

当農場では平成14年より地鶏生産を開始。当初は年間出荷羽数約100羽ほどであったが、その後鶏舎の増築等積極的に増羽を進め、現在は7棟の鶏舎で年間8,000羽を生産するまでに拡大。養鶏担当者は社内の異動などでこの10年の間に４～５名変わっている。

- 農場の概要
  企業経営　H14～地鶏生産開始
- 飼育羽数
  平成24年度実績:6,400羽
  平成25年度計画:8,000羽
- 養鶏担当者
  1名＋補助数名(兼務)



３　第1回検討会の実施

農場担当者と補助職員、経営責任者も交え基本的な飼育管理や鶏の病気について説明した後、これまでの農場成績等から見た現状とこれからの目標、それに向けた課題など意見を出し合うことで問題点の洗い出しを行った。この中で、育成率が向上しない原因としてコクシジウム症の発生による死鳥が多いこと、鶏舎を効率的に活用できていない点などが挙げられた。

【第1回検討会で出された問題点】

・育成率9割以上を目標としているが、主にコクシジウム症の発生による死鳥が多く、目標達成に至らない

・効率的な鶏舎利用による鶏の移動ストレスの軽減、清掃回数の減

４　第2回検討会の実施

2回目の検討会では1回目で出された問題点についての具体的な解決策について話し合いを行った。

一昨年4月からの病性鑑定実施状況を調べたところ、特に冬場での死鳥が多く、その原因はコクシジウムによるものだった。当農場では3日齢にワクチン投与していたが、死鳥の原因について担当者に確認したところ、寒い時期での温

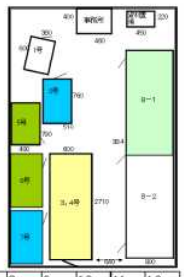
病性鑑定実施状況(H24.4~)

年	月	日	日齢	処理実施羽数	診断名
24	7	19	35日齢	46	コクシジウム
24	8	16	35日齢	10	コクシジウム
24	8	24	15日齢	10	圧死
24	8	27	18日齢	10	圧死
24	9	7	28日齢	2	コクシジウム
24	11	14	27日齢	5	コクシジウム
25	1	2	20日齢	3	コクシジウム
25	1	3	21日齢	26	圧死
25	1	31	21日齢	16	コクシジウム
25	2	8	30日齢	133	コクシジウム
25	2	16	37日齢	9/72	コクシジウム
25	2	22	15,43日齢	7/43	コクシジウム
25	2	28	21,50日齢	22	コクシジウム
25	3	21	14日齢	10	虚弱
25	4	8	25,60日齢	18	コクシジウム
25	6	19	5日齢	4	虚弱
25	8	14	6日齢	6	虚弱
25	8	16	60日齢	5	コクシジウム
25	8	23	42日齢	3	熱中症

度管理がきちんと出来ていなかったこと、オールインオールアウトが徹底されていなかったことなどが分かった。また、担当者間の意思疎通も出来ていなかったことも管理失宜につながっていた。また鶏舎を効率的に活用するため、鶏舎の収容可能羽数によりローテーションを組みマニュアル化することで、消毒や導入準備等の作業の効率化を図ることとした。

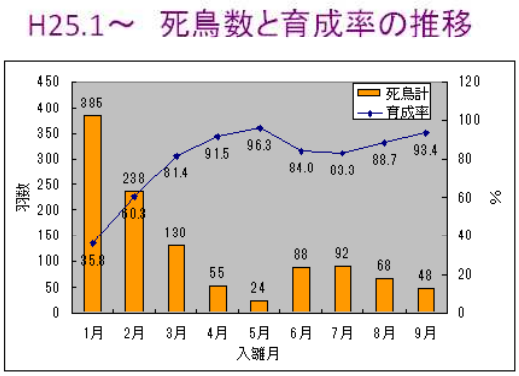
鶏舎番号	面積(㎡)	収容羽数(羽)
1号	22.8	114
2号	38.76	194
3号	80	400
4号	80	400
5号	37.9	190
6号	96	480
7号	96	480
8－1号	134.4	672
8－2号	134.4	672

5羽/㎡で計算



羽数	鶏舎	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
650	7号→2号												
800	3．4号												
650	6号→5号												
650	8-1												
500	8－2												

＊130日飼育、空舎期間18～25日
＊入雛間隔:28～35日
＊1号鶏舎を育雛で使用しない場合、予備鶏舎(羽数調整)として利用



５　まとめと課題

今回の取り組みにより、農場内の漠然としていた問題点を皆で共有出来たことで改善がスムーズに進められ成績の向上につながった。コクシジウム症についてはオールインオールアウトの実施、温湿度計を設置したりすることにより徹底した温度管理を実践することでほとんど発生は見られなくなった。また、鶏舎ローテーションをマニュアル化したことで出荷日齢を130日齢前後で出荷してオールアウトし、鶏舎清掃・消毒や導入準備などの作業の効率化を図ることができ、無駄な飼料代の削減にもつながった。また、検討会実施後は担当者間の話し合いの場が週1回設けられることで出荷の調整や双方が生産現場の状況把握することが出来るようになり、関係者間の意思疎通、協力体制の整備が行いやすくなった。今後も引き続き生産性向上のための指導並びに安心安全な地鶏供給が出来るよう支援していきたい。